

伊能図とは、伊能忠敬とその測量隊が全国を測量して作成した、沖縄県を除く日本全土の地図である。縮尺、作成時期、収録範囲などによって多くの種類に分かれるが、それらを総称して伊能図と呼んでいる。測量は今から約二百年をさかのぼる江戸時代の後期、寛政一二年（一八〇〇）から文化一三年（一八一六）まで、あしかけ一七年、一〇次にわたって行なわれた。全期間を通じて測量日数は合計三七五四日、夜間に天体観測を行なった日数は一四〇四日とされる（佐久間、二〇〇二）。測量の進行とともに、作業報告などの地図が作られていったため、伊能図と呼ばれる地図の種類は多い。本書に収録している「最終上呈図」の意義をとらえる背景として、伊能図の全体構成を概観する。

表現の特色

伊能図の最大の特色は、実測にもとづく科学的な地図ということであるが、それぞれの地図は実用一辺倒ではなく、彩色された美しい外観をもつ。また、印刷図ではなく、すべてが手書きの地図である。海岸線と街道がその曲直に沿った朱色の折線（測線）で表わされ、周辺の景観は絵画風に描かれる。測線が伊能図の骨格をなしている。測線は、まず部分ごとの下図として精密に図化し、集成されたうえで、浄書用紙に写しとられた。用紙を重ね、下図の測線の曲がり角を針で突いて写し、写しとられた点を結んで行く方法（針突法）である。こうしてできた針穴の存在は伊能図の大きな特色であるが、敷き写しや模写によってあとから作成された写本には針穴がなく、針穴の有無が地図の由来を判断するポイントの一つとなっている。

実測図である伊能図は当然、すべて縮尺に基づいて描かれている。基本の縮尺は、大図（三万六〇〇〇分の一）、中図（二万六〇〇〇分の一）、小図（四三万二〇〇〇分の一）の三種である。

地図の概観はすべての図に共通するが、細かく見ると、大図と中・小図の間に、表現内容や方法の違いが見られる。中・小図は大図の縮小・編集によって作られているため、中図と小図は詳しさに違いはあるが、表現の様式はほぼ共通している。大図の表現については、下巻の巻頭解説「二百年前の日本の姿」を参照していただきたい。

中図・小図には一度ごとの経緯線が墨で引かれ、遠方から方位角が測定できる山頂や島嶼などへは、各地からその目標に向かう朱色の方位線が引かれている。大図には経緯線・方位線は記入されていない。一枚の地図でカバーする地域が狭い大図では、経緯線一度の間隔や遠方の目標地点が一図の枠を超えてしまうためである。

地図の彩色はほぼ共通しているが、使用されている記号は大図と中・小図とで違いがある。宿駅（駅町）、湊、天測地点（極度測地）の三種は大・中・小図に共通であるが、縮小率の高い中図と小図では、国名を二重枠、郡名を一重枠で囲んで区別し、測線が国界、郡界を越える部分は、国界、郡界の記号で表示される。大図では、国界と郡界は測線と

境界が交わる地点に双方の国・郡名が並べて記載されている。大図には地域一帯についての国名は表示されていない。このほか、城下、陣屋、仏寺、神祠、関所といった記号も中・小図のみで使用され、大図では、城下は絵画風の城郭と城主名、寺社も屋根形に寺社名の注記などと、より具体的に表現されている。

地図上の方位は多彩な方位盤（コンパスローズ）で示される。この方位盤は分割図相互の接合記号もかね、地図の縁に沿って描かれた半円を隣接図に配置された同彩色の残り半円と合わせて全円にすることによって、その接合が正しく行なわれる仕組みである。

伊能図の構成

一 作成数とその構成

伊能図がどれだけ作成されたかを知るための確かな記録は残っていない。断片的な文書類や現存図によって、確認または推定できる伊能図の種類は四〇〇種以上にのぼり、そのうち何らかの形で現存が知られているのは三八〇種ほどである（表1）。種類を分ける基本的な要素は、縮尺と作成時期（測図範囲と関連）であるが、紙の大きさとの関係で、同縮尺・同時期の地図が分割図として全域を収録していることが多く、その場合の各分割部分の範囲が三番目の要素ということになる。

伊能図のなかにはこの三つの要素、すなわち縮尺、作成時期、および収録範囲が同じ図もあるが、すべてが手書きで独自の由来をもつ伊能図の場合、その由来に応じて図としての仕上がりには違いがみられる。そのため、四番目の要素ともいべき各地図の由来は、伊能図の内容評価の一定の目安となる重要な役割を果たしている。収録地域以外の三つの要素の概要は次のとおりである。

（一）縮尺

大図、中図、小図などと表現される縮尺で、大図とは縮尺が大きい図、すなわち同じ原形をより大きく表わす地図という意味である。一里を三寸六分、分数にすれば三万六〇〇〇分の一の地図である。中図は一里を六分（二万六〇〇〇分の一）、小図は一里を三分（四万三二〇〇〇分の一）とし、この大・中・小三種の縮尺が伊能図の基本の縮尺である。ただし、試行段階ともいえる第一次測量後に作成された大図、小図の縮尺は、およそ四万三六三六分の一、および四三万六三六〇分の一とされており、以後の縮尺体系とは違っている。

基本縮尺以外の地図は限られた機会に作成されたものであることが、表1からも明らかである。特別な縮尺の地図のうち、大図より縮尺の大きいものは、六〇〇〇分の一の「江戸府内図」（南・北）と一万二〇〇〇分の一の特別大図「伊豆七島」（七図）、特別地域図「巖島」の三種で、特別地域図はほかに、大図と同縮尺の「天橋立」、一〇万八〇〇〇分の一の「琵琶湖」がある。日本全図としては小図をさらに二分の一に縮めた特別小図がある。

（二）作成時期

測量行から戻ると原則として毎回、その間の測量成果を示す地図が報告書として幕府に提出された。それらが「伊能図」を形成しているわけである。測量行程の概要（表2）を

地図作成一覧(表1)と対照すると、その関係がとらえやすい。「年小図」、「第次(測量)中図」などという表現は、こうした地図作成の経過を反映するものである。

ついでながら、伊能図の呼称についてふれておこう。伊能図は共通して地図上に標題や作者などの記載がなく、書写の際や所蔵先の便宜上付与されたりしたさまざまな標題が用いられ、標題だけでは各図の伊能図の中での位置づけを判断しにくいいため、内容に直結する「年中図」といった呼称が広く用いられている。ほかに、所蔵先と関連する「東博(東京国立博物館)中図」、「アメリカ(議会図書館)大図」などの呼称もしばしば使われる。なお、伊能図の中で中間および最終の集成図にあたる文化元年および文政四年の上呈図には、序文や凡例などの中に地図の図名が含まれる。しかし、文化元年図では小図の序文に「日本東半部沿海地図」、同じく凡例に「沿海地図」、文政四年の最終上呈図では、ともに上呈された「輿地実測録」中の序・凡例に「大日本沿海輿地全図」、現存しないが記録に伝えられるところでは(「要記」『日本測量記』八所収、国立国会図書館所蔵)巻帙に「大日本沿海実測全図」、箱書きに「実測輿地全図」と、記載個所により表現が一定していない。

(三) 地図の由来

伊能図は印刷図ではなくいずれも手書きで伝えられているため、それぞれが独自の由来をもち、表現にも違いがある。現存図は由来や表現内容により、副本、写本、稿本、模写本と区分されている。

二 地図作成の経過と現存図

近年の調査・研究によって、多数の伊能図の所在があらたに知られるようになり、写本と模写本を合わせれば、作成された伊能図の大部分は何らかの形で現存するといえるまでになっている。個人も含めた所蔵先は、およそ四〇か所に及ぶ(文政四年上呈の「大日本沿海輿地全図」の所在状況一覧は本巻11頁を参照)。ここでは、地図作成の経過とその伝存状況を照合する。近年あらたに発見された各図について、発見の経緯とともに、その由来や評価を詳述する本巻8頁の解説「伊能図の発見史」と併用されたい。時期については、伊能図にとって記念すべき文化元年と文政四年の両上呈図と、それを区切りとする東日本測量期間・西日本測量期間・最終期に区分する。

(一) 東日本測量の時代

第一次の蝦夷地南岸測量から尾張 若狭以東の東日本測量の時代である。緯度一度の地上距離確定を目指しながら、蝦夷地の測量を前面にたてた幕府当局との折衝の結果ようやく実現した測量で、幕府の後援は受けるが費用の大部分は自己負担という不十分な条件から始まった。提出した報告書が評価され、回を追ってある程度事情は好転する。

寛政一二年(一八〇〇)、第一次測量の成果は、小図一枚、大図は蝦夷地一〇枚と奥州街道一枚の計二一枚にまとめられた。縮尺は小図が四三万六三六〇分の一、大図が四万三六三六分の一とされる(大谷、一九一七)。歩測で二〇〇歩の距離を一分とする縮尺という(「星学手簡」寛政一二年一月一〇日『日本洋学史の研究』所収)。小図の中度は浅草の暦局を通る。東京国立博物館に浅草文庫旧蔵の大図八枚、国立公文書館に紅葉山文庫本

と伝わる大図一〇枚がある。前者の八枚中一枚は本州北端部を含むが、それ以外はいずれも全二一枚中の蝦夷地部分のみである。小図は伊能忠敬記念館、東京国立博物館、国立歴史民俗博物館に所蔵されている。記念館のものはもちろん、東京国立博物館所蔵図も浅草文庫旧蔵で副本にあたる。国立歴史民俗博物館所蔵図は秋岡コレクションの市中購入図である。大図の本州部分は残っていないが、小図で見ても本州部分は、この時期の不十分な条件を反映して奥州街道が一本南北に延びているにとどまる。

享和元年（一八〇一）の第二次測量では、緯度一度の距離、二八・二里（一一〇・七五キロメートル）を確定し、第一の目的を達成した。地図は、全四枚で構成される中図（うち江戸近傍の一枚欠）が伊能忠敬記念館に、全二枚で構成される中図が早稲田大学図書館にある。早稲田大学図書館所蔵図は針穴のある副本である。この二つは図の構成は異なるが、第二次測量部分だけではなく、蝦夷地南岸をも含む収録範囲は同じである。高橋至時から間重富に宛てた享和二年壬戌四月五日付の書簡（「星学手簡」保柳、一九八〇所収）によれば、小図一枚、中図四枚、大図三二枚が作成された。一方、伊能家文書中にある「豆州以東至蝦夷沿海道路里程図 凡例草稿」には大図一〇枚、小図一枚を作成、小図は閲覧の便宜のために第一次測量の地域とあわせて作成したと述べられており、両者の数に違いがある。大図・小図とも現存が確認されていないので、実際の作成数は確定できない。なお、前記の凡例は大図・小図用のものだが、「此凡例八大小二図を兼て断候……六分図一枚之方二八……」という書き込みがある。第一次と同じく、上呈図は大図・小図のみで、中図は控図として大手、すなわち若年寄堀田正敦に届けられた（「星学手簡」保柳、〔前掲〕所収）。伊能図における大・中・小三種の縮尺体系の構想は、この時にはじめて姿を現した。

日本海岸の羽越地方を測量した第三次測量のあとには、上呈図は作成されなかった。尾張 越前以東の本州残余部分測量命令に対して、第三次と第四次の二回に分けて測量が行なわれたため、上呈図は第四次測量完了後にまとめて作成することとし、草稿の点検を受けるにとどまったといわれる（大谷、〔前掲〕）。

（二）「日本東半部沿海地図」

四次にわたる本州東部の測量を終えて一段落を迎えた測量事業の総まとめにあたる図で、文化元年（一八〇四）八月に上呈された。大図六九枚（蝦夷地を除く本州部分のみ）、中図三枚、小図一枚よりなる。図の範囲は、名古屋と敦賀を結ぶ線から東の本州部分で、中度の経線は江戸深川黒江町を通る。地図完成の直前に、師の高橋至時が死去した。小図の余白には、各測量地点の緯度や里程などの測量データのほか、序文（高橋景保および吉田勇太郎秀賢）や凡例があり、測量や地図について説明している。上呈後、将軍家斉（第一一代）の上覧も得て、事業の評価が定まった。残る西国の測量を幕府の直轄事業として続行し、これを忠敬に担当させるとする決定は、この評価にもとづく。同時に忠敬は小普請組配下の幕臣に取り立てられ、以後の西日本の測量は幕府の直轄事業として進められることになる。

このように沿海地図は、四次の測量の総まとめとして東日本全域をカバーするとともに、

その後の日本全図としての伊能図が成立する転機となった重要な地図群である。中図と小図の写本も比較的多く残り、当時の反響が大きかったことを思わせる。

伊能忠敬記念館に伊能家副本として、大図六九枚、中図三枚（上・中・下、二セット）がある。「沿海地図」大図はこの六九枚が唯一の現存図である。長崎歴史文化博物館に大村藩士峰源助の写した松島付近の大図があるが、原拠がいつの段階の図であるかは未検討である。中図は針穴のある上・中・下三枚が、徳島大学附属図書館（蜂須賀家旧蔵）と国立史料館（津軽家旧蔵）にあり、針穴がなく五枚に区分された写本が学習院大学図書館（陸軍文庫旧蔵）同じ五枚構成中の三枚が宮城県図書館（伊達家旧蔵）さらに同じ五枚図で地名をカタカナ書きとした、やや簡略な写本ないし模写本が、イタリア地理学協会（初代駐日総領事ロベッキー収集）にある。学習院とイタリアの両図は、それ以前の事情はわからないが同系の図と目される。

「沿海地図」の小図には由来の明らかな写図が多い。伊能家にあった副本は現在、小倉陽一氏が所蔵する。ほかに針穴のある副本相当の地図として、国立史料館の津軽家旧蔵図、国立国会図書館の堀田撰津守（のち陸軍文庫）旧蔵図がある。前者には凡例末尾に伊能忠敬の押印があり、後者の撰津守は測量当時の若年寄堀田正敦で、いずれもオリジナルに近い図である。天文方は堀田の支配下にあり、測量日記にもところどころに堀田家への地図持参が記録されている。そのほか、神戸市立博物館（佐野常民旧蔵）国立国会図書館（勘定奉行中川忠英旧蔵）名古屋市蓬左文庫（尾張家家臣大道寺家用人水野正信写）前田尊経閣文庫（加賀藩士藤井三郎、嘉永元年写）早稲田大学図書館（久須美家旧蔵）古河歴史博物館（鷹見泉石、文政一二年写）長崎歴史文化博物館（峰源助写）那谷寺（石川県）宮内庁書陵部の各写本があり、太鼓谷稻成神社（津和野市）国立公文書館には、それぞれ小図の半分の縮尺の「沿海地図特別小図」があり、いずれも後述の文政七年特別小図とセットをなしている。

（三）西日本測量の時代

後半の西日本測量は、西国測量として一括の命令による。伊能忠敬は幕吏に登用され、測量事業は幕府の直轄事業となって天文方の下役も隊員に加わり、各地での受け入れ態勢も十分に整えられて測量の密度が飛躍的に高まった。その違いは東日本と西日本の地図上の空白部分の大きさに表われており、表2からも読みとれる。

第五次の畿内・中国地方測量の成果で現存しているのは、華麗さを増した畿内・東海、中国沿海の二枚の中図である。伊能忠敬記念館の伊能家控図二セットと、針穴のある徳島大学附属図書館の二枚（五畿東海図・山陰山陽図）のほか、宮城県図書館、学習院大学図書館に写本、イタリア地理学協会に模写本がある。

この時期には、測量区域内の名勝、厳島、天橋立、琵琶湖について特別地域図が作成された。これらは贈呈用として作成されたとされる華麗な図である。記念館の控図一セットのほか、個人蔵（須賀田宗司氏）の天橋立図、安政二年峰源助写の琵琶湖図（長崎歴史文化博物館）の現存が知られている。なお、『忠敬先生日記』一九（文化四年三月二九日、『江

戸の伊能忠敬』所収)には、前記三図と浜名湖図を浅草役所へ持参したとあり、浜名湖図も作られたようであるが、その現存は知られていない。

第六次測量では、小図一枚、中図一枚、大図二二枚(四国一七枚、その他五枚)が作成された(大谷、〔前掲〕、原拠は「忠敬江戸日記」「諸国測量地図北極高度並東西度」とする)というが、現存しているのはいずれも本州部分の気賀街道二枚、摂津 大和二枚、大和伊勢二枚、合計六枚の大図控図で、伊能忠敬記念館にある。大谷が「其他五枚」としている本州部分の図が六枚現存することになる。これを含めると、この時の大図の作成枚数は合計二三枚ということになる。四国の大図は一枚も現存が確認されていない。なお、徳島大学附属図書館、学習院大学図書館(同系のイタリア地理学協会も)はいずれも「沿海地図」中図および第五次と第六次の中図をセットとしている。徳島大学本には針穴がある。「沿海地図」から最終上呈図完成まで一〇年強の間隔があることから、こうした組み合わせはこの間の中図伝写の一つのタイプであったとみてよいだろう。そのほか、前出の峰源助による写本が長崎歴史文化博物館にある。ほかに、四国のみの中図として、京都大学附属図書館に中図の稿本、国立国会図書館に針穴のある見事な小図副本(陸軍文庫旧蔵)がある。

同じ文化六年(一八〇九)には、幕府から地誌編纂事業の一環としての日本図提出の要請があり、高橋景保が当時はまだ未測だった九州および河川・国界を従来の諸図で補って、特別小図一枚を編修した。神戸市立博物館に写本「日本輿地図藁」がある。異様に細長い九州の形に特色があり、小図の半分にあたる特別小図(八六万四〇〇〇分の一)である。

二回に分けて測量された九州のうち、文化六年から二年がかりとなった九州第一次測量は、その往復に中山道や中国地方の内陸部など未測部分の測量も行なっているが、文化八年十一月一五日に高橋(景保)より地図を提出したという記述が残るのみで(「忠敬先生日記」三二、『江戸の伊能忠敬』所収)、どれだけの地図が作成されたかはわからない。しかし第一次分にあたる東南部の見事な小図・中図各一枚、大図二一枚の完全なそろいが、東京国立博物館にある。浅草文庫旧蔵である。最終上呈図ではないが、このうちの大図は特別に本巻に収録されている。この東京国立博物館所蔵図以外では、徳島大学附属図書館にいずれも蜂須賀家旧蔵で針穴のある豊前国沿海の大図三枚(下関・中津・別府)と中図副本、京都大学附属図書館に稿本がある。京都大学本は、忠敬から内田家(旧蔵者)に贈られたものである。

九州第二次測量は、文化八年から一一年にかけて三年の長期にわたっているが、公式の提出図の作成は知られていない。京都大学附属図書館に針穴のある対馬、壱岐、五島列島(上・下)、および、屋久島、種子島、平戸領の大図があり、いずれも稿本で前記のごとくこれらも伊能忠敬から内田家への贈呈図である。このほか、神戸市立博物館に大宰府付近、伊能忠敬記念館に人吉付近(藤岡健夫氏旧蔵)がある。最終上呈図の提出を前提とする草稿として、文化一一年(一八一四)後半頃に、作成されたものであろう。最終的に輿地全図の作成が命じられた時期は定かでないが、文化一二年はじめに府内の各大木戸間の位置を確定し、各回次の測量成果を全図として集成するための江戸府内繫測が行なわれている。

このことから見て文化一一年後半までには下命があったはずで、九州第二次測量の地図は上呈図としては作成されなかった可能性が高い。

渡海を含む第九次（伊豆七島など）測量には、高齢の忠敬は参加を見合わせた。伊豆半島東岸吉佐美村から小田原にかけての大図一枚の控図が伊能忠敬記念館にあり、伊豆七島の中図が神奈川県立金沢文庫（戦後購入）、長崎歴史文化博物館（峰源助、嘉永七甲寅夏七月写）にある。伊豆七島について特記すべき地図は、大図の三倍の縮尺、すなわち一万二〇〇〇分の一で、島内の山地部分まで密に彩色された特別大図七枚であり、伊能忠敬記念館に見事な副本が保存されている。

輿地全図にとりかかるにあたり、忠敬は未測地域の残る関東の再測量を願い出たが、それは認められず、かわりに江戸府内実測を命じられた。さきの府内繫測測量（江戸府内第一次測量）の成果に触発されたものと思われる。第一〇次測量にあたる江戸府内測量（江戸府内第二次測量）が行なわれ、江戸府内図（北部・南部）二枚が文化一四年（一八一七）に上呈された。時期的に前後するが、二次にわたった第一〇次の江戸府内測量の間に第九次の伊豆七島測量が挟まる形である。伊能家に伝わった府内図の控図は輿地全図とともに明治政府に献納され、震災で焼失したため、現存図はいずれも模写図で、国土地理院に南と北、国立歴史民俗博物館（秋岡コレクション、市中購入）と神戸市立博物館（南波コレクション、市中購入）にそれぞれ南、国立国会図書館に北が二枚（気象庁旧蔵）ある。

（四）「大日本沿海輿地全図」

いわゆる最終上呈図である。全測量行程の成果を総合し、作成された全国図である。中度の経線は京都の旧改暦所跡を通る。蝦夷地の未測部分は間宮林蔵の測量成果で補完された。測量の進展に合わせて作成されてきた地域ごとの地図とは別に、これまでの測量の全成果を用いて、すべてあらたに描きおこされた完成図のセットであり、いうまでもなくこれが本来の、あるいは正規の「伊能図」というべき位置づけにあるもっとも重要な地図群である。とくに後半の測量では目的地への往復のルートを複雑に組んで未測部分を埋める努力をしているため、早期に上呈された中途段階の地図の空白部が最終上呈図では埋まっているという場合が多い。府内実測の成果や、測量行の往復に未測ルートを埋めて完成させた江戸の図（図1）はその典型である。伊豆半島においても海岸線は第二次測量で測られ、「沿海地図」に含まれているが、中央部の天城ルートは第九次の成果で、最終上呈図にはじめて登場するなど、各所にそうした例がある。

この最終上呈図は大図二四枚、中図八枚、小図三枚で全国を網羅する。地図とあわせて「輿地実測録」（または大日本沿海実測録）一四冊（実測録一三巻および首 序目 一巻）も提出された。実測録にはさらに、附録の「地図接成便覧」（大図の接成一覧図）一枚が添えられた。忠敬は作成途上の文政元年（一八一八）四月に死去したが、地図は高橋景保の指揮のもと、隊員らの手で三年後の文政四年（一八二一）七月に完成、上呈された。上呈とともにそれまで伏せられていた忠敬の死去が公表され、江戸城大広間における老中らへの展覧は、高橋景保と忠敬の嫡孫忠誨、および隊員たちの手で行なわれた。大図は西日本

の部分が接合されて披露された。

記すまでもないが、本巻に収録した大図二一四枚は、この最終上呈の大図の系譜に連なるものである。幕府上呈の正本、伊能家控の副本とも、これまでにすべて焼失し、その姿は写本や模写本によって伝えられている。

現存図の状況を一覧すると、大図はごく一部しか伝存が知られていなかったが、近年相次いで模写本の存在が明らかになった。経過は後述の「伊能図の発見史」のとおりである。測量隊員の手になったことが確実に針穴のある副本相当の大図が、松浦史料博物館に五枚、山口県文書館に七枚ある。いずれも旧藩主の所蔵図で、それぞれの藩領に相当する地域を分割収録する。そのため、二一四枚の上呈図とは図郭や収録範囲に違いがあるが、最終上呈大図の表現を直接伝えている地図として貴重であり、本巻にも採録されている。松浦図は、「甲子夜話」で知られる松浦藩九代藩主松浦静山と忠敬の約束を受け継いだ内弟子の保木敬蔵が作成し、高橋景保を通じて文政五年（一八二二）に平戸に届けられた。

大図模写本は、アメリカ議会図書館の二〇七枚、国立国会図書館の四三枚（気象庁旧蔵）、国立歴史民俗博物館の七枚（秋岡コレクション）のほか、海上保安庁海洋情報部に模写本からの転写図一四七枚の現存が確認されている。最後に発見された議会図書館所蔵図は、最終上呈大図二一四枚中七枚を欠いているだけで、そろいがよい。欠図の七枚にあたる部分はいずれも前記の各機関の所蔵図中に含まれており、全二一四枚の一覧が可能となっている。議会図書館所蔵図は北海道三三枚、本州四枚を除いて、山地・田畑の彩色が省略され、領主名も記入されていないが、地図の骨格をなす測線や地名は概して的確に写されている（渡辺ほか、二〇〇一）。国立国会図書館所蔵図は、原拠となった伊能家控図（副本）の姿を忠実に表わしていると思われる。四三枚中の一枚である第一〇七号は議会図書館所蔵図中の欠図を埋める。国立歴史民俗博物館所蔵図中の五枚は裏書きなどから見て国立国会図書館所蔵図と同系であり、あとの二枚は裏書きと描画から、議会図書館所蔵図の北海道部分から脱落したものであることが明らかで、同館所蔵図中の欠図部分（第三四、三五号）にそのまま収まる。海洋情報部所蔵図中には、ほかに第一二、一三三、一五七、一六四号と、議会図書館所蔵図の欠図部分四枚が含まれる。ただし、これらは縮小された転写図で、第一二号（稚内）と第一三三号（京都）は山地が「ケバ式地形表現」に改められている。

オリジナルの正本、副本とも現在は失われているが、大正一二年（一九二三）までは存在していた大図副本の第一五五号（出雲伯耆）のモノクロ写真版が残っている。年代が古く、鮮明ではないが、模写ではない副本そのものの面影を伝える資料として貴重なものである（図2）。

中図では、針穴のある副本相当の図が東京国立博物館と日本写真印刷株式会社にある。前者は大河内（旧豊橋藩主）正敏氏旧蔵、後者はフランスのイヴ・ペイレ氏旧蔵で、フランスへ渡ったいきさつはわかっていない。針穴があり、副本と見られる地図にはほかに、部分的ながら東京大学総合研究博物館に五枚（北海道二枚、関東一枚を除く　関東は欠

図、北海道の二枚は針穴のない写本)と、北海道大学に北海道部分の二図がある。針穴がなく購入図のため由来が不明ではあるが、優れた写本として知られるものに成田山仏教図書館所蔵の八枚ぞろいがある。ほかに模写本と思われるものとして、天理大学附属図書館に佐渡島および対馬・五島を別図とする一〇枚ぞろい(戦後購入)、国土地理院には北海道を除く六枚、日本学士院に八枚ぞろい(副本の模写)がある。なお、部分的な所蔵では国土地理院に九州南部の針穴図、国立歴史民俗博物館の秋岡コレクションに中国・四国中図の写本がある。また、海上保安庁海洋情報部にも一部、中図の模写がある。

小図は、昌平坂学問所の印記があり、完成度の高い三枚ぞろいの針穴図が東京国立博物館にある。写本として、グリニッジの英国海事博物館に三枚ぞろい、東京都立中央図書館に本州東部と西南日本の二枚(蝦夷地を欠く)、神戸市立博物館に蝦夷地と日本西南部の二枚があり、個人蔵(阿部正道氏)の蝦夷地の図一枚もある。また、射水市新湊博物館には、約五〇×四〇センチの切図二枚として写した小図の無彩色写本(京都部分の一枚を欠く)がある。

(五) 最終図上呈後

事業としての測量と地図作成が完了した文政四年(一八二一)以降にも、いくつかの関連図が作成されている。

文政五年には、内弟子保木敬造が西海海路図三枚を作成し、平戸藩に納めた。瀬戸内海から九州北岸、長崎までの沿岸部分のみを描く中図で、松浦史料博物館に収蔵されている。これを五枚に分けて写した図が明治大学図書館の蘆田文庫中にある。

文政七年(一八二四)頃には、「日本国地理測量之図」として知られる小図および特別小図が編纂されている。文化六年(一八〇九)の特別小図を改訂・増補したもので、地図の周囲、余白部分には北極出地度(緯度)・経度・里程など多数の表が書き込まれている。神戸市立博物館に小図があり、同じ図を半分の特別小図に縮めたものが四点、籠瀬良明氏(故)蔵(木月矢三郎氏、鮎沢信太郎氏旧蔵を経て移蔵)、太鼓谷稲成神社(津和野藩土堀田仁助写)、国立公文書館、宮内庁書陵部(現品未確認)に、それぞれある。

文政一〇年編纂のカナ書き伊能特別小図は、シーボルト事件の押収図とされるもので、高橋景保が下河辺林右衛門らに命じて描かせた編修図である。伊能図の範囲外のサハリン、エトロフ、ウルップを含む三枚組で、地名がカタカナで書かれている。針穴がある昌平覺旧蔵図が国立国会図書館に伝わる。この図の本州部分のみを写した大槻如電旧蔵の水準の高い写本が静嘉堂文庫に、国立国会図書館所蔵図からの模写図が日本学士院にある。

明治期の「大日本沿海輿地全図」(最終上呈図)

一 正本および副本の動静

幕府に上呈され、紅葉山文庫に収蔵されていた正本は、明治政府にそのまま引き継がれた。しかし、ウィーンで開催される万国博覧会(明治六年、一八七三)に出品するための皇国地誌編纂用の資料として、太政官正院地誌課が借用して利用中、明治六年五月に皇居の火災により、太政官が保管していたほかの多くの地誌資料とともに類焼してしまった(福

井、一九八三)。そのため、明治期に活発に利用された伊能図の原拠は、伊能家に残されていた控図(副本)とその模写図ということになる。この皇国地誌とセットで編纂された日本地図(二図構成)だけは、伊能図正本を原拠に内陸部分を増補して、皇居火災前に完成していたことになる。しかし、残念ながらこの図の現存は知られていない。

明治初頭には、控図(副本)はすべて佐原の伊能家に保存されていた。明治七年に伊能家から政府に献納された副本は、大・中・小図一そろいと、輿地実測録、同便覧に、江戸府内図を加えたものである。これらの図はこれより先、明治五年一一月に、すでに工部省測量司(のち内務省測量司)が、製図のためとして伊能家から借り出していた。ところが、明治六年に幕府引継ぎの正本が焼失してしまったため、そのかわりとして、すでに借用していた副本を献納に切り替える(返却しない)折衝が行なわれたのであろう。内務省文書(「伊能測量図二代価下賜伺」)中には、その報償金額を諮る文面も残っている。この経過を見ると、正本焼失までの一時期、正本と借用中の副本の二本が同時に政府部内で利用されていたことになり、伊能図に対する当時の需要の高さがうかがわれる。

献納された副本は、内務省測量司から同地理寮に移ったのち、新政府が国勢把握のために重視していた地誌編纂業務の資料として担当部局が保管することになり、地理寮から太政官修史局(のち修史館)を経て、内務省地理局に戻る。官制の編成途上だった明治初期には組織やその名称の転変が著しく、地図の保管先もそれにともなまってめまぐるしく動いている。地図所管の動きについては東京大学史料編纂所所蔵の内務省文書中に含まれる各時期の所蔵目録からある程度推定することができる(千葉、二〇〇四)。

内務省地理局所管になったのは明治一〇年末以降で、その後、明治二三年(一八九〇)に地誌編纂業務の移管にともない、帝国大学地誌編纂掛に受け継がれる。この間、明治一七年(一八八四)に太政官文庫(翌一八年、内閣制度発足にともない内閣文庫)が設立され、各官庁備付けの図書をここで一括管理することになったため、地理局所管の伊能図も所管は内閣文庫に移った。しかし書類上の所管が変わっただけで、地図そのものは引きつづき「常借」(つまり業務用として文庫を管理する記録局から借り出し、手もとに保管)という形で、地理局、さらに地誌編纂掛(史料編纂掛)に置かれたままになっていたようである。明治末にかけて、これらの「常借」資料は順次、本来の所管先である内閣文庫に戻されていった。伊能図については目録上に「四十一年十月二十一日大学図書館へ」というメモ書きがあり、内閣文庫には戻らず、帝国大学附属図書館に収蔵されたことがわかる。大谷亮吉の伊能忠敬研究開始の時期でもあり、そのための特別な措置だったかもしれない。これが、大正一二年(一九二三)の関東大震災に遭って焼失してしまった。結果論ながら、もしもほかの資料とともに内閣文庫に戻っていたならば、と思わずにはいられない。

二 大図の模写

こうして最終上呈大図の大部分は、模写またはその転写によってしかその面影を知ることができないことになった。模写の時期や規模については、今のところあまり多くはわかっておらず、詳しい経過を解明する必要がある。大図の模写は大事業であり、それができ

たのは、模写図を手もとに備えるという業務上の強い要求があり、労力や技能も備わった限られた機関のみであったと思われる。

国立国会図書館所蔵図は、内務省地理局を淵源とする気象庁から発見されたことから、地理局に由来するものと考えられる。測量司から始まる地理局系統の機関での模写に関しては、借用時に工部省において「絵画者を募」って謄写した（館潔彦「三拾三年乃夢 日本測量野史稿」〔手稿〕 師橋〔一九九六〕所収）、地理局地誌課において中図、小図を中心とした模写が行なわれた（河田、一八九一）という記述があるが、詳しいことはわからず、いずれも回想記のため確実な情報ではない。河田の記述では、大図の模写は部分的だった印象がある。伊能家からまず借用したということは、模写を目的としていたのだから、早速模写作業に入ったという館の記述を採りたいとも思うが、断定はできない。

これとは別に明治九年（一八七六）には、地理寮量地課が、当時地誌資料を管理していた修史局地誌掛に出向いて、実測大図の不足分を写したことを示す記録がある（「内務省往復」明治九年一～一二月、修史局地誌掛〔内務省文書〕）。不足分というからには、このときすでに大図の模写が相当量できていたことになるが、現存図との関係は定かでない。また、このとき何枚の模写図が作られたかも不明である。

ところで、国立国会図書館所蔵図とともに一枚だけ残っていた外包紙には「実測輿地図関八州」とある。地理寮は明治九年に全国の大三角測量に着手しているが、その第一段階の対象地域を「関八州」としていた。「量地課」による模写が明治九年に行なわれていることと、国立国会図書館所蔵図の「関八州」という表現を考え合わせると、この二つが互いに関連している可能性もあながち否定できない。地誌資料としてすでに作成されていた模写図とは別に、三角測量用の資料として、この時期に例えば関八州が別途模写され、それゆえに三角測量が地理局の手を離れたあとは忘れられた存在になって、地理局の流れを引く気象庁に伝わっていたという可能性もある。国立歴史民俗博物館所蔵図は、記載内容や用紙から見て国立国会図書館所蔵図と同一起源と考えられるが、いずれも市中購入資料で、その流出の経緯は不明である。しかし、同博物館所蔵図中の第一三八、一四五号は関八州とは縁のない地域で、関八州部分を別途模写したという推定とは合わない。いずれにしても現段階では、明治期における伊能図模写の動きについては、断片的な史料による不確定な推測しかできていない。なお調査が必要である。

「内務省地理局地誌課所蔵地図目録」（内務省文書）には、模写図のフルセットと思われる「伊能大図第一号蝦夷 シコタン島～第二一四号大隅 屋久島」二一四枚（原本と思われるものは別に「輿地実測大図」〔伊能忠敬測定、三万六〇〇〇分の一〕と記載）と、明治一五年（一八八二）模写の一七七枚（蝦夷地三七枚を除くという注がある）が記載されている。この一七七枚は、そのための人を雇い、費用をかけて写したことが内務省文書中に残っているが（「図書局購付図書目録、附贈遺、納置」明治一一～一七・一二）、これらは原本（副本）と同様にその後、大学図書館に移された模様で、震災により焼失したと思われる。

アメリカ議会図書館所蔵図は、「第 軍管」という標記のある地図が混在している（第三軍管一枚、第四軍管三枚、第七軍管三七枚）ことや、地図上に残る作業の痕跡から、陸軍省参謀局（のち陸地測量部）の系統のものと考えられる。陸地測量部系の模写については、『陸地測量部沿革誌』明治九年の項に、伊能図の模写に着手した（当時は陸軍参謀局）との記述があることが知られているが、ここでは模写の具体的な内容にはふれていない。内務省文書中の「院省使往復」（明治九・一～九・一二、修史局地誌課）には、明治九年二月、参謀局の原図貸出依頼に対する修史局の「大図は貸せない。模写が必要なら（前記の量地課と同様）当方に来て作業するよう、面談が必要」（大意）という回答文書が残る。折衝の結果はわからないが、参謀局にはこの直後から中図が模写のため何回かに分けて貸し出されており、この時期に陸軍が中図を模写したことは確実である。しかし、陸軍から担当者が修史局まで出向いて大図の模写に携わったかどうかまでは確認できない。議会図書館所蔵図中の北海道部分三七図は、すべてに「第七軍管」という標記があり、これらは本州部分とは写しの系統が異なっていると見られる。そうすると本州部分一七七枚については、地理局が明治一五年に作成した本州部分の模写一七七枚との関連も検討が必要であろう。第七軍管（北海道）は、明治一二年（一八七九）九月の鎮台条例改訂で設置された（ただし兵備は第二軍管〔仙台〕の管轄とされた）。「第七軍管」という表書きが模写作成時のものとすれば、少なくともその標記のある北海道部分の模写は、明治一二年末から軍管制度が廃止された明治二一年（一八八八）までの間に行なわれたことになる。

『水路部沿革誌』には、明治一〇年（一八七七）から一一年にかけて内務省地理局から借り出した伊能図三〇〇余葉を写し、返却したことが記録されている。この模写図は関東大震災で焼失してしまったが、焼失前に業務参考用に転写、あるいは縮小・改描を含む転写をした大図、一四七図が現在に伝えられている。そのうち、伊能大図の番号で、第一二、一三三、一五七、一六四号にあたる四枚は、ほかには所蔵のない唯一の現存図で、本巻にも収録されている貴重な図である。ただし、海上保安庁海洋情報部（旧水路部）の図番号と大図の番号との対応は未確認で、図郭の変更などもある。同部所蔵図の明細についてはなお調査が必要である。『水路部沿革誌』の記述では、内務省から借用して写したとなっているが、前記のとおり、明治九年の段階では修史局は、地理寮量地課と陸軍省参謀局に対して、中・小図は貸し出したが大図は貸せないの、必要ならこちらへ来て写すようにと言っている。地図の所管が修史局から内務省地理局に移り、担当者が変わったための規制緩和か、あるいは原図ではなく模写本を借り出したのか、気になるところである。

なお、『内務省地理局地誌課所蔵地図目録』（内務省文書）には、「伊能大図武蔵縮図（二万六〇〇〇分の一）」（油紙裏打）、「伊能忠敬東京市街実測縮図（一万二〇〇〇分の一ならびに三万六〇〇〇分の一）」（筆者注 原図は六〇〇〇分の一）、「伊能中図写（第一号～一〇号）」（天理大学附属図書館所蔵図と枚数が一致）などの記載もある。

[注] 参照した内務省文書はいずれも東京大学史料編纂所蔵

文献

- 大谷亮吉 『伊能忠敬』(一九一七年)岩波書店〔八六 九三〕
- 河田巖 「本邦地図考」『史学雑誌』所収(一八九一年)六(七)〔五〇七 五一八〕
- 佐久間達夫 「伊能測量隊宿泊地一覧表」『江戸の伊能忠敬』所収(二〇〇二年)伊能忠敬研究会〔一七一 二七七〕
- 千葉真由美 「皇国地誌編纂過程における地図目録と地図主管の移動」『内務省地理局における地図蓄積 = 管理構造の復元的研究』所収(二〇〇四年)(二〇〇二・二〇〇三、科研費研究成果報告)〔一二 四六〕
- 福井保 『江戸幕府編纂物』(一九八三年)雄松堂出版〔三七五 三八〇〕
- 保柳睦美 「伊能図の意義と特色」『伊能忠敬の科学的業績』所収(一九八〇年)古今書院〔一 三八〕
- 師橋辰夫 「三拾三年乃夢 日本測量野史 東京実測図余聞」『地図』九(一)所収(一九九六年)〔三五 三九〕
- 渡辺一郎・永井信夫・鈴木純子 「アメリカで発見された伊能大図」『地図』三九(三)所収(二〇〇一年)〔一八 二五〕

主要参考文献

- 水路部編 『水路部沿革誌』(一九一六年)
- 長岡半太郎監修・大谷亮吉著 『伊能忠敬』(二〇〇一年)岩波書店(一九一七初版、第二刷)
- 陸地測量部編 『陸地測量部沿革誌』(一九二二年)
- 保柳睦美編著 『伊能忠敬の科学的業績』改訂版(一九八〇年)古今書院
- 東京地学協会編 『伊能図に学ぶ』(一九九八年)朝倉書店
- 渡辺一郎 『図説 伊能忠敬の地図をよむ』(二〇〇〇年)河出書房新社
- 『伊能忠敬研究』(伊能忠敬研究会)各号
- 『地図』「伊能図特集号」(日本国際地図学会)三四(二)(一九九六年)

図 1 沿海地図大図(初図)[江戸付近][左図](伊能忠敬記念館蔵)と、最終上呈図大図[江戸付近][右図](国立国会図書館蔵)

図 2 「伊能忠敬大日本沿海輿地全図(大図)出雲伯耆地方」(『歴史地理』13(1)(明治42年)所収)(国立国会図書館蔵)

表1 作成時期別の伊能図の種類と図数

作成年度	対象地域など	大?図	中?図	小?図	特別		
地域図	特別小図	特別大図	江戸				
府内図							
1800 (寛政 12)	第 1 次測量地域の蝦夷地東南岸と奥州街道				21 (11)		
	1 (1)						
1802 (享和 2)	第 2 次測量地域の伊豆・相模から本州東岸と蝦夷東南岸				32 (0)		
4 (4)	1 (0)						
1804 (文化元)	尾張・越前以東の日本東半分の沿海と主要街道。日本東半部沿海地図 (沿海地図)	69 (69)	3 (3)	1 (1)			
1807 (文化 4)	第 5 次測量地域の畿内および中国沿海。特別地域図は、巖島、天の橋立、琵琶湖を描く贈呈用の大縮尺の図		2 (2)		3 (3)		
1809 (文化 6)	第 6 次測量地域の四国および大和・気賀街道				23 (6)	1 (1)	
	1 (1)						
1809 (文化 6)	日本全図 (特別小図)。幕府の要請で高橋景保がまとめた暫定版。未測量地域は既存資料で補完				1 (1)		
1811 (文化 8)	第 7 次 (九州第 1 次) 測量地域の九州東南部				21 (21)		
1 (1)	1 (1)						
1815 (文化 12)	第 8 次 (九州第 2 次) 測量地域の一部				8 (8)		
1816 (文化 13)	第 9 次測量地域の伊豆東岸および伊豆七島図				1 (1)		
1 (1)		7 (7)					
1817 (文化 14)	第 10 次測量で行なわれた江戸府内の大縮尺図						
		2 (2)					
1821 (文政 4)	全測量結果を総合した最終版上呈図 (大日本沿海輿地全図)				214 (214)		
	8 (8)	3 (3)					
1822 (文政 5)	大坂より長崎に至る海路の両岸を示す (西国海路図)						
3 (3)							
1824 (文政 7)	特別小図の改訂版 (日本国地理測量之図、特別小図現存 4 点中の 3 点は同一縮尺の日本東半部沿海地図とセット)				1 (1)	1 (1)	
1826 (文政 9)	特別小図の描図範囲に北海道・樺太を加え、カナ文字で記した図						
		3 (3)					
(合計)	438 (378) 枚	389 (330)		23 (23)	9 (8)	3 (3)	5 (5)
	7 (7)	2 (2)					

注 1 数値は作成数（一部推定を含む）（ ）内は現存数である。 2 作成数・現存数は、右記文献を基本とし、その後の調査で判明した事項を追加した。 大谷亮吉『伊能忠敬』597 - 614 頁、1917 年、岩波書店 / 渡辺一郎「最近における伊能日本図の所在と概況について」『地図』所収、第 34 巻 2 号、1996 年 / アメリカ伊能大図展実行委員会編『アメリカにあった伊能大図とフランスの伊能中図』169 - 174 頁、2004 年 3 個人所有での確認の難しいものは除外した。 4 同一の図が複数あるときは、2 枚目以降はカウントしない。

表 2 伊能隊の作業一覧表

測量回数	測量地域	忠敬年齢		出発年月日		到着年月日	
出張							
日数	測量距離	旅程距離		隊員（*1）		天測	
日数	（*2）手当ほか						
		旧暦	新暦	旧暦	新暦	測量隊	
	伊能忠敬	下役	内弟子	棹取	従者	計	
第 1 次 奥州街道と							
蝦夷地東南岸	56	寛政 12 年					
閏 4 月 19 日	1800 年						
6 月 11 日	寛政 12 年						
10 月 21 日	1800 年						
12 月 7 日	180 日	3,224km	3,224km	3,224km	門倉隼太		
平山宗平							
伊能秀蔵							
吉助							
長助							
（函館まで）	5 人	74 日	手当 1 日銀 7.5 匁		180 日分 22 両 2 分	人足 3 人・	
馬 2 頭（蝦夷・馬 1 頭）（賃銭定額）							
第 2 次 相模・伊豆							
	57	享和元年					
4 月 2 日 1801 年							
5 月 14 日 享和元年							

6月6日 1801年

7月16日 64日 572km 572km 572km 平山郡蔵

平山宗平

伊能秀蔵

尾形慶助 嘉助 5人 76日 手当1日銀10匁 230日分38兩
と20匁 人足2人・馬1頭・長持ち1棹(賃銭定額)

本州東海岸

享和元年

6月19日 1801年

7月29日 享和元年

12月7日 1802年

1月10日 166日 2,550km2,550km2,379km

第3次 出羽・越後 58 享和2年

6月11日 1802年

7月10日 享和2年

10月23日 1802年

11月18日 132日 1,701km1,701km1,701km 平山郡蔵 / 伊能秀蔵 / 尾形
慶助 / 大平雄助

久兵衛

兵助 6人 79日 手当60兩 人足5人・馬3頭・長持ち1棹(無賃)

第4次 尾張・

越前以東 59 享和3年

2月25日 1803年

4月16日 享和3年

10月7日 1803年

11月20日 219日 2,176km2,176km1,752km 平山郡蔵 / 伊能秀蔵 / 尾形
慶助 / 津村大兄 / 小野良助 吉兵衛

久兵衛 7人 116日 手当82兩2分 人足5人・馬3頭・長持ち1棹(無賃)

第5次 畿内・中国 61~62 文化2年

2月25日 1805年

3月25日 文化3年

11月15日 1806年

12月24日 640日 5,383km6,992km5,385km高橋善助

坂部貞兵衛

市野金助

(途中帰還)

下河辺政五郎

(途中参加) 平山郡蔵 / 伊能秀蔵 / 永沢藤次郎 / 小坂寛平 / (途中参加) 門倉隼太 /

(供侍) 門谷清次郎 (途中帰還) / 佐藤伊兵衛 利助

吉平 半六

丈助

惣兵衛

角二

三治

栄治 19

(17)

人 208日 伊能忠敬手当 旅扶持・5人扶持1倍(1日に米5升) 雑用金・1力月3両2分 宿代・1力月銀43匁 別段手当・1日銀14匁

高橋善助手当 1力月2両3分 別段手当・1力月1両

下役 / 旅扶持・2人扶持1倍(1日に米2升) 雑用金・1力月1両 手当・1日銀1匁5分 別段手当・1力月1両3分

内弟子手当 1力月2両3分 (忠敬)人足7人・馬3頭・長持1棹(無賃) (下役)馬1頭

第6次 四国・大和路 64~65 文化5年

1月25日 1808年

2月21日 文化6年

1月18日 1809年

3月3日 377日 3,442km4,568km4,457km 坂部貞兵衛

芝山伝左衛門

下河辺政五郎

青木勝次郎 伊能秀蔵

植田文助

久保木佐右衛門

/ (供侍) 神保正作 佐助

善八 藤吉

文吉

兵助

惣助

文蔵 15人 113日

第7次 九州東南地域

と往還路 65~67 文化6年

8月27日 1809年

10月6日 文化8年
5月9日 1811年
6月28日 631日 7,005km 7,409km 6,256km 坂部貞兵衛
下河辺政五郎
青木勝次郎
永井甚左衛門 植田文助 / 梁田栄蔵 / 箱田良助 / (供侍) 成田豊作 (途中帰還) / 黒田
藤吉 / (坂部の供侍) 松井沢次 平助
長蔵 清七
不詳4名 17
(16)
人 289日
第8次 九州残部
と往還路 67~70 文化8年
11月25日 1812年
1月9日 文化11年
5月3日 1814年
7月9日 914日 11,530km 13,083km 9,378km 坂部貞兵衛
永井甚左衛門
今泉又兵衛
門谷清次郎 尾形慶助 / 箱田良助 / 保木敬蔵 / 久保木佐右衛門 / (供侍) 加藤嘉平次
 / 宮野善蔵 / (坂部の供侍) 笠原三之助 佐助
甚七 清兵衛
清助
友吉
新八
弥兵衛 18人 310日

1 (*1)は渡辺調査、(*2)は佐久間達夫氏調査、その他は保柳資料による。
第9次の伊豆七島の測量、第10次の江戸府内の測量は省略した。